

(Japanese Academy of Learning Disabilities)



日本LD学会会報

第35号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内

〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9 ムギショウビル2F TEL. 028-649-0090 FAX. 649-1213

URL. <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jald/>

情報化時代における事例の利用

群馬松嶺福祉短期大学教授

鈴村 健 治

事例研究は決して個を重視した個人的な研究ではなく、一般性のある研究で大いに利用すべきです。どうしても個人を対象にした研究ということで、適用範囲が限られてしまうために情報価値が低いと判断される傾向があります。

しかし、LD全体の特徴や問題を知るよりも、事例により示されたアセスメントや指導方法のほうの利用価値が高いはず。たとえば、算数に問題があるといっても、個々の問題はまちまちで、到底一つの問題としてまとめることはできません。表面的には似た事例でも、調べてみると入力過程と表出過程の違いであったりすることは、実践においてはよくあることです。ですから多くの事例の紹介が必要なのです。

しかし、それでは切りがないという反論がでるでしょう。個々の事例をいくら集めても所詮はその個人にあてはまるだけで、一般化した形で適用することはできないと考えがちです。しかしそれは、一般化された研究にもあてはまることで、範囲はおのずと限定されます。それではどうして両

者の間に違いが生じるのでしょうか。

それはたった1個の標本を母集団に当てはめようとするためです。母集団にその事例を当てはめることは、標本が小さすぎて無理です。そこで、「事例は一般性のない特殊な研究であるから一般化（母集団への当てはめ）できない」と結論づけられてしまうのです。

事例研究はそのようなやり方ではうまくいきません。発想を逆転するのです。つまり、母集団の中に事例と似たお子さんがいたら、標本に合わせた指導をしてください、とするのです。したがって、色とりどりの子どもの事例があればあるほど参考になるし、該当する確率も増えます。しかし、その情報が広く流れなければ価値はありません。

この時点でインターネットの出番がくるのです。北は北海道から南は沖縄まで、「どうぞ該当する子どもがいたら利用してください」と誘うのです。だれの目にも触れるようにすれば研究は蓄積されて深まります。このようにインターネットの利用は情報化の時代にふさわしいものと思われま